
物語バトンをどすこいシスターズが答えたら。

さすらい物書き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語バトンをどすこいシスターズが答えたら。

【Nコード】

N3938P

【作者名】

さすらい物書き

【あらすじ】

“ボケ”の「はりきり」と“ツッコミ”の「よりきり」。ふたりあわせて「どすこいシスターズ」。このコンビが誕生してから、今日でなんと5年が経ちます。この二人とともに、わたくし「さすらい物書き」も「小説家になろう」にデビューしました。——おかげさまで、本日、さすらい物書きは5周年を迎えることができました！ 5周年の記念として、彼女たちコンビに再登場してもらうことにしました。ふたりのへんてこりんな会話を、どうぞお楽しみくださいませ。 2010・12・9 さすらい物書き

物語バトンをどすこいシスターズが答えたら。前編（前書き）

「物語バトン」。別名では「悪魔撃退バトン」とも呼ばれている、かなり長めのバトンを、この二人に答えさせてみました。

たぶんほとんどの方にとって、これまでに見た中で「最長」のバトン回答になると思います（笑）。

物語バトンをどすこいシスターズが答えたら。前編

「ねえよりきりちゃん。いま団長から渡されたんだけど、二人でこの“バトン”に答えろだって」

「……相変わらず唐突ね、団長も……あんたも」

「練習までまだ時間あるしいいじゃん。暇つぶしにやろ」

「別に私ヒマじゃないよ。これからレポート作るんだから」

「今じゃなくてもいいじゃん。なんだったらあたしが手伝ってあげてもいいし」

「あんたに手伝って貰ってスムーズにいった試しがないよ。……ほら、団長にきまぐれに毎回つき合ってたら時間がいくらあっても足りないんだから」

「……よりきりちゃん、今日なんか機嫌悪いね。生理？」

「ベタなことを云わないでよー!」

「じゃ、当たり？」

「ハズレ。……生理前ではあるけど」

「ほら、カイロあげるから。やろつよ、面白そうなんだって！ 売店でシュークリームも買ってきたんだよ」

「うわ、ホントだ」

「これ一緒に食べながらやろつよ。“物語バトン”」

「……物語、バトン？」

「そう。なんかね、ふつうのバトンと違って、なんか質問にストーリー展開があるんだ」

「へえ」

「面白そうでしょ？」

「……別に、いいよ。やっても」

「そうこなくっちゃ！ ……えっとね、まだ全然中身は見えないんだけど、このバトン、どうやらファンタジーRPG風の世界みたいな設定なんだ」

「ふっん。どれどれ……？」

第一章『出発の時』

1. あなたの名前と職業は？

「……名前はわかるけど……職業？」

「ゲーム風の設定だから、たぶん“戦士”とか“魔法使い”とか、そういうやつのことだよ。よりきりちゃんだったらやっぱし——“狂戦士”、とかかな？」

「さらっと失礼なこと云わないでよ。それより、ふつうバトンってひとりで答えるものでしょ？ この「あなた」っていうのは、私のこと、それともあんだのことなの？」

「あんたって呼ばないでよりきりちゃん。ちゃんと「はりきり」っていう、親がつけた立派な名前があるんだからさあ」

「アンタの親が怒るよ、そんな嘘ついたら。……で、この「あなた」はりきり、それとも私？」

「よりきりちゃんにしよう。あたしはね、狂戦士ヨリキリの肩に留まったりまわりを可憐に飛びまわるフェアリーみたいな存在で、よりきりちゃんにアドバイスをするの。ティンカーベルみたいなイメージ」

「フェアリーはいいとしても、その“狂戦士”はやめてよね。どうせなら私、魔法使いの方がいい」

「魔法使いがいいの？」

「だって私、ハリー・ポッター好きだもん」

「マクゴナガルのな？」

「いや……どうせならハーマイオニーの方がいい」

「いいよ。じゃ、魔法使いね。それじゃ……」

名前：よりきり

職業：魔法使い

「最初の質問はこれでいいよね。次に行くよ」

2. 何時ごろ出発しますか？

「何時ごろ？ 時間とかわざわざ聞くんだ」

「どうするの、よりきりちゃん」

「出発って、ふつつ朝じゃない？ あんまり深く考えなければ」

「じゃあ。深く考えるなら、いつ？」

「……敵に狙われていたりしてってシチュエーションなら、見つけにくいように夜移動するのがいいんでしょうけど。……どうせ、答えなんて無いんだから、いつだっていいんじゃない？ 朝にしろ

「う」

「そんないい加減に答えちゃ駄目！」

「……なんでよ」

「よりきりちゃんは魔法使いなんでしょ？ 魔法使いは時間に正確なのが特徴なんだから」

「それって……『ロード・オブ・ザ・リング』のこと云ってんの？」

「そう。魔法使いは遅れない。早くも来ない。欲しがらない。寝坊しない。魔法使いは正確に来ようと思ったときに来るんじゃない」

「なんか余計なものを意図的に加えたでしょ」

「あの有名な白ひげの魔法使いダンブルドアが云ってるんだから、時間の問題はないがしろにしちゃ駄目なの」

「ダンブルドアじゃなくてガンダルフ！ わざと間違えてるでしょあんた」

「あんなにたつぷりの白いひげに覆われたら見分けつかなくてもしょうがないよ」

「ダンブルドアとガンダルフの違いはわかるよ、いくらなんでも」

「けどよりきりちゃんだってこないだ『ハリー・ポッターのダンブルドア校長の役者さんって、2で代わったっけ、それとも3からだっけ？』とかって聞いてたじゃん」

「あれは……まあ、そうだけど」

「あれ？ このシュークリーム前食べたのと味が違う。どうして？」

「……パッケージは似てるけど、メーカーが違うからだよ。私はどつちの也喜欢きだけど」

「そっか、間違えて入れちゃったんだ。あたし普通のヤツ買ったつもりだった」

「飲み物、買ってこようか？ 私がおごるよ」

「ああ、いいよ。お茶でいい」

「そう？ ……はい、どうぞ」

「ありがと。さ、それじゃあ、次の質問にいつてみようか」

3・これから悪魔を倒しに行きますが、

何を持って行きますか？（A・B・C・と指定する事）

「……悪魔を倒しに行くんだ。“魔王”じゃないんだ。あたし、魔王の方がいいな」

「へんなところにこだわるね、はりきり」

「“悪魔”ね。——この物語バトンのモチーフって、『ドルアーガの塔』なのかな。それとも『悪魔城ドラキュラ』なのかな？」

「ごめんはりきり。私どっちも知らない」

「あたしも『悪魔城ドラキュラ』は全然知らないよ。『ドルアーガの塔』はお兄ちゃんがやってたから少し知ってるけど」

「……あんたって、なに考えてんのかときどきわかんなくなるよ」

「それがあたしのチャームポイントだからね。よりきりちゃんのチャームポイントは肌がきれいなことだね」

「なによ、急に誉めても何も出ないよ」

「そんだけ肌がきれいだからナチュラルメイクが決まるんだよね」

「はりきりだって肌きれいじゃん」

「うん、きれいだけど、なんかさ、よりきりちゃんの顔は“愛されメイク”が似合う顔だから羨ましい」

「愛されメイク？」

「そうだよ。小悪魔メイクの反対。小悪魔メイクは男の人の目を奪うメイクで、愛されメイクは男の人の目を引きつけるメイク」

「えっと……どこが違うんだろ？」

「簡単に云うとSかMかってことよ」

「簡単に云いすぎでしょ、それ！」

「香澄ちゃんはMだから、愛されメイクが似合うのかなあ」

「ちょ、ちよつと、急に本名で呼ぶのやめてよ！ あんたが私のこと名前で呼ぶの何年ぶり？」

「1年ぶりくらい？」

「それになんで私がMなの？」

「どうして香澄ちゃんがMになったのかなんてあたしは知らないよ。それよりも大事なのは相性のいいSとめぐり逢うことだと思うな」

「もっともらしいこと云って。それに、私MとかSとかホントによくわかんないんだけど」

「可愛い子猫がいるとするじゃない？」

「う、うん」

「それを見て『うわあ可愛い〜』って云って抱き上げるのが“猫好き”」

「猫好きの説明はこの際いいから」

「Mはね、その猫に爪で引っかかれたり噛まれたりしても怒らないで、むしろ嬉しくなるタイプのこと」

「ふうん」

「Sは、可愛いから、屋根の上に置いて、降りて来れずに困ってる様を眺めて嬉しくなっちゃうタイプのこと」

「美梨は、どっちなの？」

「あ、あたしのことも本名で呼ぶんだね。——あたしは屋根の上に上げたことあるよ。あたし、いじわるなんだ」

「美梨がいじわるなのは付き合い長いからよく知ってるよ」

「だからさ、“小悪魔メイク”の方を極めていくしかないわけよ、あたしとしては」

「……………ねえ、もしかして、さっきのバトンの質問の“悪魔”から連想して、メイクの話を延々してたんじゃないでしょうね」

「え？ あ、そうか。うん、そうみたい」

「……………あんたってヤツは……………」

「それじゃ、悪魔退治に持っていく3つのアイテムを決めちゃいましょう。よりきりちゃん、なんにする？」

「魔法使いなんだから、もちろん基本的な装備——ローブを着て、杖を持って、そういうのはカウントしなくてもいいんだよね？」

「え、駄目なんじゃない？ 3つのアイテム以外は手ぶらだよ」

「そんな装備で、悪魔退治どころか近所への散歩もできんわ!」

「そんなに怒らないでよ。じゃ、着るものと、背負い袋と杖は最初から持ってたことでもいいよ。さてさて、その他に、でいいから、3つのアイテムは何を持っていく?」

「そうだね。美梨だったらなににする?」

「えつとね、『ごはんですよ』はマストアイテムだね。これでいつでもごはんを美味しく食べれる」

「それ、本気で云ってるの?」

「半分本気、半分冗談。よりきりちゃんならカントリーマアムかな? シュークリームは潰れちゃうもんね」

「はいはい。他の二つは?」

「相手がドラキュラなら、十字架とニンニクと木の杭と銀のピストルを持っていくんだけど、“悪魔”っていうのがどいうヤツなのかわからないからなあ……」

「さりげなく4つ云ってやがる、こいつ」

「ほれ。行くのはよりきりちゃんだから、自分で選んで」

「それじゃ、食料と、水の入った水筒と、金貨の入ったお財布かな」

「わお! おどろくほど無難な優等生的回答!」

「いいでしょ、別に」

「それじゃあ……」

A ・食料

B ・水の入った水筒

C ・金貨の入った財布

「これでいい？」

「うん。次の質問に行こう」

第二章『山道で………』

1 ・山道で、魔物と遭遇しました。
持って来た道具を使って、どうやって倒しますか？

「持ってきた道具を使って？ しまった。使えそうなものがない」

「魔物に、おむすびを食べさせて倒した、つてのでどう？」

「あ、それいいね。それでいこう」

2・倒した後のキメ台詞はなんですか？

「決めゼリフかぁ……。難しいな」

「好きなヒーローとかヒロインの決めゼリフをパクレばいいんだよ。よりきりちゃんの好きなヒーローってなに？」

「うーん、そうだなあ。急に云われてもな……」

「じっちゃんの名にかけて！ とか、真実は常にひとつ！ とかさ」

「どっちも名探偵の台詞じゃん。——はりきりの好きなヒーローって、誰？」

「あたしが好きなのは、『ローンナイト』のマイトと、『ジヨジヨ』の空条承太郎と、槇原敬之かな」

「ひとりヒーローじゃない人が混ざってない？」

「マッキーはヒーローだよ。歌で聴く人に勇気をくれるからね」

「なるほど、じゃ、マッキーがあんたにとってヒーローだったとして、だけど“決めゼリフ”はないから参考にはならないでしょ？」

「マッキーの決めゼリフか。」

『もう恋なんてしないなんて、云わないよ絶対！』

「そのセリフ、どんなシチュエーションで云うのよ」

「よりきりちゃんはどうなの？　好きなヒーローは誰？」

「……えっと、小さいとき好きだったのは、セーラームーンかな」

「よし、きまり。それじゃ、決めゼリフは、

『月に代わってお仕置きするけどいいよね。答えは聞いてない！』」

「ほらまた、なにか勝手に足してるでしょ」

第三章『砂漠で……』

1　……道に迷いました。どうしますか？

「砂漠とか通るんだ。けっこうハードだね」

「ここでよりきりちゃんにクイズです。砂漠で遭難したときにとるべきベストな行動とは何でしょう？」

「クイズ？　なぞなぞじゃなくて？」

「子どもじゃないんだからなぞなぞなんてしないよ。真面目なクイズ」

「あんたがいつも不真面目だから聞いてるんじゃない」

「まあまあ。それで、答えは？」

「うーん……状況とか、持ってる持ち物とかにもよるんじゃない？
遭難って、どういうシチュエーションなの？」

「旅客機に乗ってて、砂漠を横断したら、故障しちゃって、不時着したの。乗客は……10人くらい。水とか食料は、最低限は揃ってる。地図や、方位磁石や、航空写真もあるの。さ、どうする？」

「真面目に答えるなら、……移動せずに、パラシュートとかを使って日陰を作って、できるだけ動かないようにして救助を待つのが正解なんじゃない？」

「おおっ?! ……面白くないなあ。それが正解だよ」

「あ、そうなの？」

「砂漠で下手に歩きまわったらすぐに死んじゃうんだって。水分不足にならないようにするのが一番肝心なことで、水が一番重要なアイテム。塩は採っちゃ駄目。あとは、火を燃やしたり、パラシュートとかを使って目立つようにしたりして、救助隊が見つつけやすいようにする。……よりきりちゃんって、賢いんだね」

「だからほめてもなんも出ないよ」

「それじゃさ、さっきのバトンの質問はどうする？ 道に迷ったんだって」

「この場合、待つてたって助けが来るわけじゃないんだから、脱水症状を起こさないように給水しながらボチボチ歩くしかないんじゃない？」

「はいよ。じゃ、次の質問」

2・とった行動は、全くの無意味でした。どうしますか？

「なによ、無意味って」

「歩いて駄目ってことは、寝てみようか。果報は寝て待て」

「……なんでもいいよ」

3・……さらに無意味でした。しかし、そこへ神様が現れ、あなたを砂漠から脱出させてくれました。お礼の言葉は？

「また、実にファンタジックというか、ナンセンスというか」

「ゲームとかではよくあるんだよ、神さまが助けてくれるのって」

「へえ、そうなの？」

「女神リーブラとか、女神イシターとかが現れて、窮地を救ってくれるの」

「うっん……これまた元ネタがわからん。はりきりって、常識はなしのに無駄な知識はたくさん持つてるよね。ときどき感心する」

「それってほめてるの？ けなしてるの？」

「いや、けっしてほめてはいないな」

第四章『悪魔の城へと続く道』

1. ここまで来ると、さすがに強敵ばかり現れます。
そこで、あなたはこう考えました。

『そろそろ新技が必要だな……』

その技を習得するための修行はどんな修行？

「強敵ってどんなんだろうねよりきりちゃん」

「ファンタジーで、強い敵って云ったら……やっぱりドラゴンなんじゃない？」

「ええーっ。ありがちなあ。他には？」

「ほか？ そうだなあ。ほら、ロード・オブ・ザ・リングにも出てきたトロールとか」

「それもベタすぎ！」

「じゃ、どんなモンスターだったらいいのよ」

「強敵といったらふつつビホルダーでしょう！」

「ビホルダー？ はじめて聞いた」

「目玉の暴君！ 大きな一つ目の化け物で、口もついてるの。すべての魔法を無効化する能力があつて、魔法使いには天敵なんだよ」

「一つ目の化け物……」

「イメージが浮かばない？ わかりやすく云うとね、『ゲゲゲの鬼太郎』のバックベアードみたいな感じのヤツよ」

「ごめん、バックベアードも知らないや」

「じゃあ、帰りにレンタル屋さんに寄つていこうよ。今夜はゲゲゲの鬼太郎鑑賞会を開こう」

「別にいいよ、観なくても。……それより、そろそろ練習がはじまる時間だよ？ この続きは明日にしない？」

「ええーっ!!」

「そんなに大声出さなくてもいいじゃない」

「練習後に、晩ご飯食べにいこ！ それで、続きを考えよう！」

「……いいよ」

* * *

「お疲れさま」

「晩ご飯、どこに行く？」

「焼き肉定食が食べたい」

「いつものところね、わかった。じゃ、私はチキスパにしよう」

* * *

「さあて、続きをやりですか！」

「どこまでやったっけ？」

「砂漠で遭難して、バックベアードに襲いかかれたところだったかな？」

「違うよ。……なんか、強敵が現れて、“新技”を習得することになったんじゃないかっただけ？」

「そっか。新技。新技の修業か」

「美梨なら、どんな修業をする？」

「修業といったらやっぱり“精神と時の部屋”だよな」

「……ドラゴンボール？」

「正解！ その部屋の中では外界よりもずっと遅く時間が進むから、短時間で長い修業ができるの」

「なるほど、うってつけなわけね」

「ホントは、山ごもりが一般的なんだろうけど……」

「あんたって、発想が昔のマンガ的ね」

「よりきりちゃんならどんな修業する？」

「このキャラは魔法使いなんだから、新しい呪文の修業ってことでしょ？ だけど、悪魔討伐の旅の途中にそんな修業の時間なんてあるのかなあ」

「そうだよな。状況がよくわかんないから、次の質問も見てみようか」

2・新技を習得するのに、どれくらい時間がかかると思いますか？

「時間はかけてられないでしょうに」

「短時間で編み出せる新技かあ。あんまり想像できないな。ハリー・ポッターではさ、あの白い光がふわ～って出てくる魔法、どのくらいで会得したんだっけ？」

「『エクスペクト・パトローナム』のこと？ あれは、やっぱり何日もかかったんじゃないっけ」

「そうだよ。必殺技は、簡単に会得できちゃダメだよ」

「じゃあ、旅の途中だけど、一応修業の時間はとれたってことにしておこうよ。どこか安全な王立図書館みたいなところで修業できたって設定ならいいんじゃない？」

「期間は？」

「……一週間」

「はい。それじゃ次の質問」

3・新技の名前は？

「ギャラクティカ・マグナム？」

「知らない」

「……なによ。とりつく島もない」

「新技の名前か。つまり、新魔法の名前よね」

「どんな魔法？」

「攻撃魔法かな。それで、できれば魔法の効かないような相手にも通用するようなものがないな」

「なかなか贅沢というか、わがままな要望だねよりきりちゃん」

「だってさ、4人パーティーとかなら戦士や騎士が仲間について、魔法の効かないモンスターが出てきても剣でやつつけてくれるだろうけど、こっちは魔法使いひとりなんだから、物理攻撃ができないとこのあとの戦い、厳しいと思うんだ」

「それはもつともね」

「こんなのはどうかな。召還魔法。大きな岩の塊とか、鉄の塊とかを敵の頭上に召還して、押しつぶすの」

「うわぁ……過激な攻撃だね」

「これなら相手が魔法に耐性があってもダメージを与えられる」

「あ、だけどよりきりちゃん。その魔法、建物の中とかで使っても大丈夫なのかな？ 悪魔の城とかで使って、自分も建物が崩れて巻き込まれたら意味がないよ？」

「そうか……それじゃ、鉄の塊だけじゃなくて、鋭い刃物みたいなものを降らせることができる魔法」

「ううーん……刃物はしつかり斬らないと、降ってくるだけじゃダメージは与えられないと思うよ」

「……意外とこういうところには厳しいんだね、はりきりは」

「やるからには凝らないと」

「ま、そうだね。……じゃあ、これでいい」

「いいアイデア思いついた？」

「強大な鉄の塊を落とすんだけど、地面につく瞬間に消すことができるの」

「いいんじゃない、それ」

「よし、決まり！」

「で、魔法の名前は？」

「名前かあ……」

「よりきりの必殺技、パート2！ とか」

「あんた好きだねそれ」

「鉄の塊って、どこから喚んでくるの？」

「そうだな。……それは、単なる鉄の塊じゃなくて、なんか別の巨大な鉄の巨人とかの足だったりするんだよ。それで、巨人の足だけをこの世界に喚びだして、敵を踏み潰してもらうんだ」

「よりきりちゃんも、意外とこういうの思いつく人なんだね。意外だった。さすがはあたしの友だちだね」

「感化されちゃったのかも」

「それじゃ、新技の名前は“女神のかかと落とし”ってことで、決定！」

「ん？ 少し変わってるな。まあいいか」

4・新技を習得し、先へ進むと門がありました。そこに何がいますか？

「門番、かな？」

「敵の騎士かな。どんな門番だろう」

「悪魔の騎士？」

「それってどういう姿？」

「えっと……角が生えてて、牙が生えてて……」

「ベタね。いい意味で」

「ほめてないでしょ」

「とにかく、悪魔の騎士と呼ばれる門番がいたのね。次行くよ」

5・「4の回答」は敵みたいです。新技を使ってみました。
その時の相手の台詞は？

「さっそく新技使っていいんだ」

「女神のかかと落とし”ね。——あ、よりきりちゃん。料理来たよ」

「うわあ、やっぱり美味しそう」

「話の続きは食べてからにしようか」

「そうしましょ」

「それじゃ、……いったただっきまゝす！」

「鉄板がジュウジュウいつてる。これが好きなんだよね」

「熱そお。舌、火傷しないの？」

「冷ましながら食べるよ。美梨は猫舌なんだっけ？」

「猫舌。そういう熱々の料理は10分は放置しないと食べれない」

「そうか。たいへんだね」

「ずるいなあ。あたしも熱々のできたてが食べれるようになりたいなあ」

「無理しない方がいいよ」

「スパゲティに、タバスコ入れないの？」

「私、あんまり辛いのはダメ」

「そうだったけ。……香澄ちゃん、サザエとかの巻き貝が苦手なのは“何舌”っていうか知ってる？」

「え、そんなのあるの？」

「うん。“巻き舌”」

「……ダジャレじゃない」

「ダジャレじゃないよ。なぞなぞだよ」

「ほら、さっきの質問の続き考えるよ。——『新技を使ってみました。そのときの相手の台詞は？』か。“女神のかかと落とし”を使ったんだよね。どんなセリフを云うかな？」

「『最初に云っておく。我々はかゝなり、強い！』とか」

「ゼロノス？」

「普通はまず『動くな！我々は悪魔軍の騎士だ。妙な動きをしたら容赦はしないぞ！』とか云って、それから仲間を呼ぶ」

「仲間なんて呼ばれる前にしとめちゃおうよ」

「で、『女神さまーっ!』と叫んで死ぬ」

「意味がだんだんわからなくなってきた……」

6・あっけなく倒せました。門が開き中へ入ると、城には力ギがかかってました。

「……かかってました、って、質問形になってないんだ」

「鍵がかかってるからって、はいそうですかと引き下がるようなやりきりちゃんじゃないってところを、悪魔たちに見せつけてやりなよ。……さて、どうする?」

「魔法使いらしく、鍵開けの呪文を唱える」

「アンロックね。開くのかな?」

「開いたことにしよう。でないと先進めないよ」

「それもそうだね」

第五章 『悪魔城・1階』

1・城の中に入ると、突然お腹が痛くなってきました。その原因は?

「謎の腹痛が魔法使いよりきりちゃんを襲った。よりきりに500ポイントのダメージ。よりきりは死んだ」

「コラコラ簡単に殺すな！……しかし、なんで急に腹痛くなっただろ」

「変なものを食べたとか……」

「ここに来るまで食堂どころか街にも寄ってないよ」

「持ってきた食料にカビが生えてたとか」

「うーん……それはあるかもしれないけど」

「あ、そうだった！」

「なに？」

「忘れてたよ。お腹痛い理由。よりきりちゃん、自分で云ってたじゃん」

「え？ なに？」

「生理」

「……お店の中で、普通の声で生理とか云わないでよ、恥ずかしい」

2・その状態のまま最上階へと目指して行きます。

「お腹痛いのを治す魔法を使った、とかは無しかな、はりきり」

「それは無しだよ。回復呪文や治癒系の呪文は僧侶や神官や司祭しか使えちゃダメ。閻魔大王が許してもそれはあたしが許さない」

「お蔵しいことで。それじゃ腹痛を抱えたまま進む、と」

2階へ上がると、階段の前にとても強そうな敵がいます。

戦える状態ではないので、話し合いをしようと試みます。どんな会話？

「階段の前に、強敵出現、ね。この敵って、どんなやつ？」

「会話が交わせると云うことは、スライムみたいな知性のないモンスターじゃないってことだから、亜人族系統のモンスターなんだろうね。かといって、ゴブリンとかホブゴブリンとかオークとかは“強敵”って感じじゃないし、リザードマンか、ミノタウロスか、サイクロプスってとこかな」

「リザードマンって、身体が人間で頭がトカゲの人？」

「正確に云うと違うかな。二足歩行で、人間並み……いや、人間以上の体格をしてるトカゲって云った方が近いかな。尻尾もあるし」

「あ、なるほど。いわゆる“半獣人”じゃないわけね」

「おつ、よりきりちゃん。半獣人なんて、なんか本格的な云い方だね」

「これでもハリポタファンですから。ケンタウロスとか良く出てくるし。顔が人間で、身体が馬なのがケンタウロス。上半身が人間で、下半身が魚なのが人魚。顔が牛で、身体が人間なのがミノタウロス」

「列挙したねえ！ そうだね。ファンタジーの世界には、そんな“組み合わせ系”のクリーチャーはたくさん出てくるよね。馬に羽根がついてるのがペガサス。上半身が鷲で、下半身がライオンがグリフォン。グリフォンと馬の合いの子が、ハリー・ポッターにも出てくるヒポグリフ」

「あ、ヒポグリフって、そうなんだ」

「物知りはりきりちゃんに、わからないことはなんでも聞いてよよりきりちゃん」

「マニアックな質問にだけは強いからなあはりきりは」

「さて。階段の前の強敵とは、そんなこんなで“サイクロプス”でした。魔法使いよりきりちゃん、どう切り抜ける？」

「あれ？ サイクロプスはどんなモンスターだったけ？」

「一つ目の巨人！ 目がひとつしかないヤツは、だいたい強いんだよ」

「ビホ……なんとかみたいに？」

「ビホルダー。バックボードも強いし、目玉のオヤジも……目玉のオヤジは弱い。鬼太郎も弱いし」

「ゲゲゲの鬼太郎も目、ひとつしかないの？」

「あの人は一つ目というより、生まれたときに片目が潰れちゃっただけだから、今いったラインナップには加えちゃダメだったね、ごめんなさい」

「変なところで律儀に謝るのねあんた。……あれ？　じゃあ、鬼太郎のお父さんの目玉のオヤジは、鬼太郎の片方の目じゃないの？」

「違うよ。目玉のオヤジは、お父さん自身の目だよ。死んだお父さんの目が、我が息子を心配するあまり、もそもぞ動き出して、視神経の部分が手とか足になって、赤ん坊の鬼太郎のところに這っていったの」

「そうなんだ、知らなかった」

「まあ、鬼太郎の過去の詮索はそのくらいにしておいて、サイクロプスの対処法を考えようよ」

「はいはい。『戦える状態ではないので、話し合いをしようと試みます。どんな会話？』……話し合いねえ」

「相手の名前がわかればね。サイクロプスは背広も着ないし名札もつけないだろうからなあ」

「名前がわかればなんかうまくいくの？」

「交渉術の基本だよ。できるだけ相手の名前を呼ぶ。自分の名前を繰り返し呼んでくる相手を、人はだんだん敵とは感じなくなって親しみを感じてくるの」

「ほう」

「あと、自分が話すより、できるだけ相手の話を聴くことを心がける」

「なんか講義で聴いたことをそのまま話してない？」

「ちがうよ。マンガで得た知識だよ」

「なるほど……」

「というわけで、サイクロプスと戦えない状態のよりきりちゃんは、サイクロプスの身の上話を聴いてあげることになりました」

「別にいいよ、それで」

3・三時間近くにも及ぶ会話の末、

ようやく戦闘モードに突入です。相手の弱点はどこだと思いますか？

「おいおい！ 戦わないための会話じゃなかったの？ 3時間は無駄じゃん！」

「よりきりちゃんには無駄だったかもしれないけど、彼にとっては

有意義な3時間だったと思うよ」

「その“彼”を今から倒さないといけないんでしょ？ やっぱり無駄だよ！」

「怒んないの。短気は損気よ」

「怒ってはいないけど」

「短気・損気・ウソツキ。いつもドキドキ」

「なにそれ」

「うつん、こつちの話。じゃ、いよいよ戦闘シーンだね！ 相手の弱点を攻めるのは勝負の鉄則！！ 遠慮なしにやっちゃえー！！」

「弱点か。……目かな？」

「目が弱点じゃない生き物なんてそういないからね。いいんじゃない？」

「よし。それじゃ、サイクロプスの目を、攻撃呪文で射抜く」

「そういつときは、『これでもくらえ！』と叫ぶのがお約束なんだけどね」

「それも、漫画かアニメかのネタ？」

「うつん、違うよ。とある有名なゲームに、『これでもくらえ』っていう攻撃呪文があるんだ」

「……そういう知識、はりきりと出会わなかったら一生知らないままだっただろうね」

「嬉しい？」

「いや、特に」

「冷たいなあ。よりきりちゃんって、Mのくせにあたしに対してけつこうズバズバ云うよね」

「長い付き合いだからね」

「この恨み、いつか晴らしてやる〜！」

「そんなこと云って、あんた気を悪くしてもひと晩寝たらそんなこと全部忘れてるでしょ？」

「そうだった？」

「“根に持つ”っていう言葉の意味、わかんないでしょ」

「それくらいわかるよ。草の根分けても探し出せ、とか、根も葉もない噂、とか、『あの人根は善人なのに、根暗よねえ』とか。根に持つっていうのは、そういうことよ」

「はい、不正解」

4・勘が当たったみたいで、一発で倒せました。しかし、

その戦闘で持つて来た道具・AとCを失ってしまいました。

「『これでもくらえ』の一撃でサイクロプスを倒しちゃった！　よ
りきりちゃんすごい！」

「でも、3つのアイテムのうち2つも失っちゃったみたいよ。Aと
Cってなんだっけ？」

「Aはキス。Cは――」

「それ以上云わないで。私が恥ずかしいから」

「Aは食料。Cは金貨だよ」

「はじめからそう答えてよ。じゃあ、残ったのは水の入った水筒だ
けなのか。このあと大丈夫なのかな。……って、元々、悪魔城に來
てしまってるんだから、食料も金貨も使わないか」

「なによりきりちゃんノリツツコミやってるの？」

「別にノリツツコミとかじゃないよ」

5.そして、いつのまにか腹痛も治っていました。治った原因は何
ですか？

「痛みに負けルナ？」

「はいはい、ベッキーの出てるCMね。はい、次行くよ」

第六章『悪魔城・2階』

1・2階に上がると、敵が全くいませんでした。
しかし、上へと続く階段が見つかりません。

「今度は頭を使う階みたいね」

「階段がないフロアー。人影もない。ひんやりとした空気が漂っているだけなのに、どこかしら敵意のような気配も感じとれる――」

「はりきり。あんた小説家になれるんじゃない？ 今みたいな表現力と、妙な知識量があれば面白い物語が書けそう」

「小説？ あたしあんまり小説読まないからな。絵がないとき、途中で飽きちゃうんだ」

「はりきりらしいね」

「上への階段、どこにあるんだろ？」

「えっと、例えばさ、このフロアーから上の階に上がる手段は、階段じゃないのかもしれないよ」

「お、いいねよりきりちゃん。例えば？」

「魔法陣かなにかが隠れてあって、そのうえに乗るとふわふわ浮いて、上に上がっていけるとか」

「『ヨンヨン召喚』か……！なるほど。……ケムケムみたいに浮かんで昇るわけか……！」

「……おい。自分の世界に入ってしまったわないで」

「あ、ごめん。あまりにもよりきりちゃんがいいこと云うから、いい」

「ホント変なやつね、あんたって」

「ありがとう」

「ほら。ふつう『変なやつ』って言葉を誉め言葉っていう風にとるひと珍しいんだよ？ 美梨は“変”って云われると基本的に喜ぶよね、いつも」

「“変”は誉め言葉だよ。個性的、ってことだから」

「そうかもしれないね。……よし、それじゃさっきの質問の答えは、『魔法陣で浮かんで昇る』ってことで」

「ファイナルアンサー？」

「うわ、……それ、ちょっと古くない？」

2・残念ながら、あなたの勘はハズレのようです。あなたはまた探し始めます。

そんな中、どこからともなく声が聞こえてきます。なんて聞こえますか？

「魔法陣、なかったみたいだねよりきりちゃん」

「うん。ま、それはいいや。それより、声が聞こえてきたんだって。なんの声なんだろう」

「敵はまったくいなかったはずだから、建物自体が声を発しているとかかな。壁とか、床とか」

「なんて聞こえてきたの？」

「それはよりきりちゃんが答えて」

「うん。『引き返せ』とかかな？」

3・その声は、天井から聞こえてきます。天井を探してみると、学校で良くみかける登り棒が出てきました。登り棒は得意ですか？

「天井からだったか」

「登り棒が降りてきたってことは、『引き返せ』というより『こつ

ちへ来い』ってことみたいだね。畏なんだろうけど」

「香澄ちゃんって、登り棒得意だった？」

「また急に本名で呼ぶ。——得意だったよ。運動はけっこうできる方だった。美梨も運動神経いいよね」

「うん。——香澄ちゃんって、部活、軟式テニスだったんだっけ？」

「そうだよ」

「日焼けしてた香澄ちゃんって、イメージが浮かばないなあ」

「黒かったよ。夏は真っ黒」

「今はこんなに色白なのにね」

「真っ黒って云うより真っ赤、って感じだったな。ほっぺとかすぐ赤くなるし、日焼けしたら皮が剥げんの」

「うわぁ、剥がしたい!」

「じらじら」

4・その登り棒を登って行くと、さっきまでどこにも敵はいなかったのに、

下からドンドン登って来るではありませんか!

この危機的状况をどう乗り切りますか? (20字以内で答えよ)

「うへえ！ 敵がどんどん昇ってきたんだって。よりきりちゃん、どうすんの？」

「芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を思い出すわね」

「古典を思い出してる場合じゃないよ！」

「いや、そういう意味じゃないんだけど」

「でもさ、どうして急に敵が出現したんだろう。どこ探してもいなかったはずなのに」

「姿を消していた、とか？」

「透明マントか何かで？ でもさ、なら不意打ちしてよりきりちゃんを倒しちゃえば良かったんじゃない？」

「それじゃ……登り棒を登りはじめたら、壁とかから自動的に出現する仕掛けになっていたとか」

「ああ、そうかもしれない」

「珍しく納得してくれたね。よしそれじゃ、この状況を切り抜ける方法を考えよう。……しかし、なんでここにきて20文字以内なの？」

「国語のテストじゃあるまいしね」

「ホントだよ。——こういうシチュエーションを切り抜けるのって、なにかいい方法あるのかな」

「油を持って来てればね……」

「油を垂らすの？」

「うん、そう。滑って昇って来れなくなる」

「油の代用を水するのは……無理があるか」

「油のように滑らないだろうね。他の方法を考えよ」

「なにかを落とすとか、投げつけるとか云っても、もう手持ちのアイテムは水筒くらいしかないしね」

「仕方ない。最後の手段よ」

「ん、なんか思いついた？」

「がんばって 一目散に 昇りけり」

「わざわざ五・七・五にしなくてもいいのに」

「これじゃ１７字しかないや」

「別に２０字で答えなくちゃいけないわけじゃないんだよ？」

「こつこつというのはピッタリ答えるのが気持ちいいの」

「余計なところにこだわるんだから……」

「がんばって 一目散に 昇りけり (つづく)」

「はい。上手にできました」

いよいよ悪魔城の最上階までたどり着いた魔法使いよりきり！

はたして悪魔との戦いの行方は？！

物語ボタン後編は、明日12月10日UP予定！

乞うご期待です！！

物語バトンをどすこいシスターズが答えたら。前編（後書き）

というわけで、続きます♪

現時点で、内容が“剣と魔法のファンタジー世界”を舞台にしたものなので、ジャンルを「ファンタジー」に設定しております。

物語バトンをどすこいシスターズが答えたら。後編

第七章『悪魔城・最上階』

1. いつのまにか最上階です。

登り棒のせいで、だいぶ体力を消耗しました。

そこで、少し休もうと思います。どれくらい休みますか？

「なんとか敵の追撃からは逃れられたみたいね。しかももう最上階に着いちゃった」

「だけど体力を消耗しちゃったんだって。どれくらい休む？」

「悠長に休憩していいシチュエーションとは思えないなあ。休めても4〜5分つてところじゃない？」

「回復アイテムもない、休む場所もない。治癒呪文が使える仲間もない。ひどいゲームだよね、これ」

「本当にこんなゲームがあつたら売れなさそう」

「“クソゲー”って、昔たくさんあつたんだよね。そんな感じがして懐かしいから、別に嫌いじゃないけどね」

「あいかわらずポジティブね、あんたって」

「え？ モルディブ？」

「ポジティブ！ てかいまの聞き間違いは絶対わざとだ」

「ばれたか。じゃ、休憩時間は5分でいいの？」

「そうだね。安全なら、1時間半くらい寝れば一番いいんだろうけど」

2・休んでいると、いつのまにか眠ってしまいました。
そこへ敵が現れ、眠ったまま地下牢へ……。起きた時のあなたの第一声は？

「なんだ。結局寝ちゃうんだ」

「魔法は精神力を消費するし、登り棒で体力も使い切ってたからね。だけど、敵に捕まっちゃうなんてドジだな」

「私が悪いわけじゃないよ。そういうバトンの質問なんだから。でもさ、敵はどうして私を殺さずに地下牢に連れていくだけにしたんだろう」

「いつでも殺せるという余裕。じゃなきゃ、よりきりちゃんの美貌に惑わされたか。さすがは愛されメイクの達人」

「メイクそんなに上手くないし。悪魔退治のさなかに化粧はしないでしょ」

「目覚めの第一声は？」

「うん。『ここはどこ？』」

「『わたしはだれ？』」

「記憶喪失か私は！」

「湿った空気と、石の壁と、鉄格子から、魔法使いヨリキリは、そこが悪魔城の地下牢であることを察した」

「ナレーションありがと」

3．なんと、あなたの持っていた最後の道具で牢のカギがあきました。

牢から出られた感想は？

「またえらく簡単に出られたもんね」

「最後の道具ってなんのことだっけ」

「水筒、のことよね」

「水で鍵が開くんだ。ここの牢屋の鍵って紙でできてるってことなのかな」

「そつだとしたら、敵も相当ヌケてるね」

4・牢から出ると、最上階への直通エレベーターがあるではないか！
このエレベーターの操作方法は？

「悪魔って、危機管理能力なさすぎだよ」

「まあまあ、そこは愛すべきクソゲーの世界だからということで大目に見てよ」

「はりきりがいいのなら、私はいいけど」

「直通エレベーターの操作方法は、だってよよりきりちゃん」

「エレベーターってボタンで動かす以外に、なんか別の方法あるの？」

「たぶんない。でも、一応考えてみて」

「そうよね。ファンタジーの世界だからね。……合い言葉を唱える」

「おう、いい感じ。なんて合い言葉？」

「開け、ゴマとか云ったらあんた絶対『ベタね』とか云うでしょ」

「いうよ」

「うーん、合い言葉って云ったものの、何も思いつかないなあ」

「じゃあ別の方法を考えようよ。ボタン以外でね」

「……………うゝん……………レバー式になってて、それを操作して好きな階に行く、とかはダメ？」

「うわあさすがよりきりちゃん！！ その回答はベストだよ！！ これまでのバトンの質問の中で一番良かった！ すごい！ 感動した！」

「こんなのがはりきりの感動のツボなんだ。私はそのことにびっくりしたよ」

5・なんとか最上階まで戻ってこれました。
さあ、悪魔はどこにいますのでしょうか。どうやって探しますか？

「せっかく魔法使いなんだし、魔法を使って調べるのがいいのかな」
「センス・イビルの呪文ね」

6・しかし、なかなか見つかりません。どうやら今は留守のようです。

帰ってくるまで待つ事にしました。何して待っていますか？

「悪魔、いないんだって。どうするよりきりちゃん？」

「最上階はどんな部屋なんだろう」

「悪魔の個室なんだろうね、きつと」

「悪魔の弱点とかを調べるヒントになるようなものを探して待つ。そついうのが見つからなくても、なんかすごい武器とか見つかるかもしれないし」

「悪魔が持つてる武器を下手に扱うのは危険だよ。だけど、弱点を探すのは名案かも」

「悪魔の弱点つて、なにかな？」

「そうだね、聖水かな？ 神が清めし水。水筒の中に入れてくれば良かったね、せつかく水筒は生き残ってたのに」

「そついうことは悪魔の城に着く前に行つてよ」

「それじゃ、調べものだけでいいんだね、よりきりちゃん」

「いいよ。別に他にすること思いつかないし」

「ヒマつぶしの定番といったら“しりとり”なのに。どうしてそれが出てこないかなあ！ 怒るよよりきりちゃん！」

「……まさかこんなことで怒られるとは思ってなかった」

7・一時間後、ようやく悪魔が城に帰つて来たみたいです。部屋に入っていきました。ここで意気込みを聞かせて下さい。

「悪魔にしては、なんか、主婦が外出から帰宅したみたいなノリね」

「エコバックに買い物したものをぶら下げて帰ってくる悪魔って、シニールだけど、なんか嫌だな。あたしのイメージと違う」

「はりきりのイメージでは、現れたのはどんな悪魔？」

「『あくま』『マジで？』『でかい！』『行くぞ！』」

「……なにそれ？」

「3文字しりとり」

「もう時間つぶしは終わったの！　いまは目の前に悪魔が来てるんだから。で、どんなやつなの？」

「美青年」

「……へ？」

「だから、見た目はすごく格好いい、美青年よ。だいたい、ラスボスが最初から本来の姿を現してるのなんてあたし見たことないもん」

「そんなもんなのか」

「そういうもののな！　金髪で白い肌の美青年。それじゃ、魔法使いよりきりちゃん。今の意気込みを聞かせてください！」

「——オレ、参上！」

「うわ、——やられた!」

「うわっ、ずっとこけないでよ、危ないよ! あんたリアクション大
きすぎ! ……ねえ、ごはんも食べ終えたし、食後のコーヒーも飲
んだんだから、そろそろ出ようか。続きは——」

「続きはすぐによりきりちゃんちゃんの部屋でします」

「これからうち来るの?」

「レンタル屋さんで劇場版ゲゲの鬼太郎を借りてから」

「鬼太郎はいいよまた今度で。それじゃ、コンビニによって、それ
からうちで続きをしましょうか」

「やったあ!」

* * *

「……いっぱい買ったわね、あんた」

「カントリーマアムもシュークリームも買ったよ」

「ありがと。それ以外はみんな辛い食べ物ばっか。お腹こわさない
の?」

「生まれつき胃腸が丈夫で」

「刺激物の食べ過ぎは良くないからね。気をつけな」

「はい。ささ、汚いトコだけど上がって」

「それはわたしが云うセリフであって、客のあんたが云うセリフじゃない」

「たしかに。それに、お部屋めちゃくちゃ片付いてるね。いつ来て
も片付いてる。すごいなあよりきりちゃん。血液型何型？」

「こっに見えてB型だよ」

「そうか、意外」

「なに型だと思ってた？」

「うーん、……そう云われると、特に思い当たらないけど」

「また思いつきで喋ってたのね。はりきりはなに型なの？」

「あたしもB型だよ」

「一緒なんだ。でも……あんたのB型は、なんか納得」

「さ、自己紹介はそれくらいにして、バトンの続きをさっそくやら
うか」

最終章『決戦』

1・悪魔が攻撃をしてきました！こちらも攻撃開始です！
持って来た道具は一つしかありません。どうやって戦いますか？

「おお！ もう最終決戦なの？ しかもいきなり攻撃してきた」

「これはさ、はりきりの云う“美青年”の姿でそのまま攻撃してきたってこと？ それとも本性を現してるのかな」

「まだ人間の姿かな。だけど、目の色とか、口から覗く牙とか、登場したときより邪悪さが増してる感じ」

「なるほど、了解。さてさて、こっちも攻撃開始なんだって。水筒しか持っていないのにどうやって云うんだ？」

「水筒はこの際置いとこうよ。まずは、必殺“女神のかかと落とし”！」

「あ、忘れてた。修業で会得したんだから使わなくちゃね」

2・互角です。悪魔は本気を出して来ました。
持っていた道具が壊れました！その時のあなたの心境は？

「互角だって。たった一人で悪魔と五分五分に渡り合うのはすごいなあ」

「自画自賛？」

「いや別にそんな意味は込めてない」

「でも本気出して来たんだって。いよいよ悪魔が本来の姿を現すよ」

「どんな姿？」

「美青年の、端正な顔つきが、内側から膨らんでいくの。そして、マスクが割れるみたいに、顔が割れる」

「うわ、グロイ」

「そんで、中から別の顔が現れる。目は赤く光り、肌は濡れたウロコに覆われた暗緑色。ぬるぬるした粘液に包まれてるの。長く鋭い爪のついた腕が四本。脚も四本。牙も長く伸びてきて、唾液がしたり落ちている……」

「うひゃあ。それは、まさに悪魔だ」

「驚いてる場合じゃないよ、よりきりちゃん。反撃しなきゃ！ あ、でも、水筒は壊れちゃったんだって。そのときの心境は？」

「水筒は、この場面ではもう必要ないからさほどショックじゃないな」

「お気に入りの水筒だったのに？」

「そついう設定だっけ？」

「よりきりちゃんの実を案じた幼なじみの男の子が、旅立つ日の前の晩、手渡してくれたの。『この水筒を、オレだと思って連れて行ってやってくれ……』って云って」

「こんなときに、水筒に無駄に感情移入させないの！」

3. このままでは勝てないと判断したあなたは、友達を召喚する事にしました。誰を召喚しますか？

「友達を召喚？」

「クライマックスのこの場面で、新キャラ登場か。さすがクソゲー」

「クソゲーって、下品な云い方だね」

「それは『クソゲー戦記 ドラゴン・サーガ』の作者渡辺電機（株）先生に失礼だよ」

「そんなマンガあるの？」

「あるよ！ あたしの心のバイブルだよ」

「そうなの？」

「……昔、一回パラパラと読んだことがあるだけ」

「そんなことだろうと思った」

「それで、誰を召喚する？」

「あんた。はりきり」

「え？ あたし？」

「そうよ。ここまで来たんだから協力しなさい」

「はい。じゃ、あたしもこのバトルに参戦ね。あたしの職業は？」

「私が魔法使いなんだから、はりきりは戦士でいいんじゃない？」

「ええっ！ あたしのイメージに合わないよお！ 却下却下あー
！」

「また変なところにこだわる。じゃあどんなキャラならいいの？」

「あたしはね、ネクロマンサーがいい」

「ネクロマンサー？」

「うん。簡単に云うと“死霊使い”。スケルトンやゾンビを操ったり、敵を腐らせて殺したりする、邪悪なる闇の魔法使いよ」

「それってどっちかっていうと、完全に悪魔側の人間じゃない」

「毒をもって毒を制す！ 毒を食らわば皿までよ！」

「大丈夫なのかな。そういう魔法は、悪魔には効かないんじゃない……」

4・お友達と協力してもまだ勝てそうにありません。もう一人召喚して下さい。

「ほら！ あんたの攻撃は効かなかったじゃない！」

「おつかしいなあ？ でももう決めたことだから、くよくよ過去を振り返らずに、前向きに戦いましょう！ おう！」

「威勢がいいなあ。……もう一人召喚しろだって。誰にする？」

「すみなちゃん」

「ああ、純名ちゃんね」

「あ、けどすみなちゃんが怪我とかしたら可哀想だから、やっぱり別の人にする」

「あんたがそんな心配するの似合わないよ」

「失敬ね。それでも後輩思いのいい先輩だとみんな勘違いしてくれてるんだから」

「じゃ、純名ちゃんはやめて、誰にする？」

「じゃあここは、このボタンを持ってきた団長さん」

「団長を召喚するんだ。悪魔とか一発で倒しちゃいそう」

「もしくは悪魔と仲良しになって一緒に世界征服しちゃうとか」

「そんな感じだね」

「よし、内輪ネタはそれくらいにして、次の質問に行こう」

5. 三人で協力して戦ってます。そんな中、携帯電話が鳴り始めました。

お友達の一人に電話がかかって来たみたいです。

「あたしかな？ 団長さんかな？」

「あんたでいいよ。っていうか、この世界に携帯電話がつながるの？」

「『魔法にかけられて』のラストシーンでも、あっちの世界に電話つながってたんだから、それはセーフじゃないかな」

「デイズニー映画がそうなら、それに倣いましょうか。誰がかけてきたんだろ？」

「お母さんかな。あたし、明日誕生日だから」

「え？ そうなの？」

「そうだよ」

「そっか。……はりきり、明日はどうすんの？」

「予定はないよ」

「一緒に買い物でも行く？」

「行く！」

6・悪魔も電話の内容が気になってきたようです。
しょうがないから電話の内容を教えてあげました。悪魔は何と答えましたか？

「どうして敵にわざわざ電話の内容を教えるんだ？ このボタン、だんだんリリティがなくなってくるね」

「それが悪魔の作戦なのかもしれないよ」

「電話の内容って、はりきりのお母さんから、『美梨、あんた明日誕生日よね』って話なんでしょ？ 悪魔はそれ聞いてなんて答えるだろう」

「それはよりきりちゃんが答えてよ」

「うーん。……電話でお母さんが、美梨の欲しいものを聞く。美梨は欲しいものをねだる——」

「あ、うちのお母さん、今年のプレゼントはもう準備して、明日届くように送ったんだって」

「あ、そうなの？ そしたらプレゼントの内容についてじゃなくて、お母さんから電話があったこと自体に対して悪魔は、『……実家のオレのおふくろ、元気にしてっかな』とつぶやいた」

「ほうほう。つまり、悪魔は若干ホームシックになったわけね」

「そういうことにしときましょ」

7・悪魔は、すっかり今の発言で弱点を喋ってしまいました。その弱点とは？

「今の発言で？」

「ということは、“お母さん”が弱点ってこと？ マザコンなんだ。——悪魔はマザコンが判明した。謎の腹痛が悪魔を襲った。悪魔に500ポイントのダメージ。悪魔は死んだ」

「いやいや、そんな簡単には死なないでしょ」

「そりゃそうだ」

「マザコンが弱点って判明しても、攻撃に参考にはしづらないなあ」

8・弱点を聞いた三人は、早速行動にうつしました。大ダメージのようです。あと何分で倒せそうですか？

「弱点を聞いて、行動に移して、大ダメージ？ いったい私たちはどんな攻撃をしたんだろう……」

「『世界征服なんて、こんなバカことはやめろ。故郷のおふくろさんも泣いてるぞ！ ……ささ、お母さん、息子さんを説得してあげてください』」

「古い刑事ドラマか！」

9 ……予想していた時間よりも長引いています。

そろそろ皆体力の限界です。

あなたは最後の一撃に出ようと思い、技名を叫びながら突撃しました！

その技名は？

「あなたは、ということは、魔法使いの私が攻撃したってことよね。ということは攻撃呪文を唱えたってことでいいよね」

「いいと思うよ」

「女神のかかと落とし」じゃダメなのかな？」

「わざわざ技名を聞くんだから、これまでに登場していない魔法を使わなきゃ」

「またハードルを上げる」

「さ、いよいよクライマックスなんだから、盛り上がっていきましようー!」

「技の名前を叫びながら突撃か……うん」

「テロリストとかが立てこもる建物にSWATとかが突入するとき
はたいてい司令官的な人が『行け行け行け行けーっ!』って叫ぶよ
ね。あたし、あんなの好きだなあ」

「この場合、チームで突入するわけじゃなくて単身の突撃なんだから、そのセリフは合わないそう」

「ほらほら、がんばって考えて!」

「うう、ダメだ、なんも浮かばないよ。はりきり、今回だけは助けて。あんたが考えて」

「えっつ。うん、いいよ」

「ほっ」

「それじゃ、魔法使いよりきりちゃんは、魔法の杖を構える」

「うん」

「そして、それを天にかざしてこう叫ぶ。『世界を革命する力をー
っ!』」

「それもなんか元ネタあるの?」

「あるけど、ま、いいじゃない。すると、その杖は輝く剣に変化するの」

「おお、けっこう格好いいっぽい」

「さらに、『炎よ、来たれ!』と叫ぶ」

「うんうん」

「そしたら剣が炎に包まれるの」

「いいじゃない」

「そしてよりきりちゃんは剣を構えて敵に突撃しながら最後に叫ぶ。
『レッドファイヤー!』」

「レッドファイヤー?」

「よりきりちゃんの身体から吹き出した魔法力が炎に姿を変え、よりきりちゃんの身を炎が包みこむの。もちろん、自分の魔力が作りだした炎だから、よりきりちゃん自身は熱くない。魔力の業火を身に纏ったよりきりちゃんは、炎の鳥のような姿になって悪魔の身体に突進する」

「普通にかっこいいな、それ」

「正義の炎、プラス剣の一閃が、真の姿を発現させた悪魔の身体を斬り裂く!」

「やった！」

「悪魔はまっぴたつになって、炎にまかれて倒れていく」

「——はりきり、あんたって、こういうイメージする力って云うか、妄想力というか、想像力はホント豊かなね」

「ありがとう」

「よし、これで悪魔は倒したのかな？」

10・悪魔も最後の一撃に出てきました！ その時の悪魔の台詞は？

「え？ 終わりじゃないの？」

「そう簡単にラスボスが倒されたんじゃないよ」

「悪魔の方も、これが最後の一撃みたいだね。これをしのげばクリアかも」

「悪魔の台詞って、なかなか。もうラストだから、今度はよりきりちゃんが考えて。有終の美を飾るんだよ」

「ほいほい。……悪魔の一撃。『——貴様も、道連れにしてくれるわー！』とか」

「あ、けっこういい。たしかに悪魔が最後に云いそう」

「気に入ってくれて良かった」

11・まだ耐えるのか！……と思いきや、悪魔は力尽きて消えてなくなりました。

「やったあ！」

「倒したんだね。おめでとう、よりきりちゃん！」

「うわあ、しっかし、……長かったなあ。これだけ全部やるのに、かなり時間かったよね」

「そうだね。でも、楽しかった。よりきりちゃん、かなりいいセンスしてると思うよ。あたし、ますます見直しちゃったよ」

「あんたに氣に入られるのも大変だね。楽しかったけど、くたびれちゃった。バトンって、こんなに大変だとは思ってなかった」

「まあ、これに懲りずに、また機会があったらやろうよ」

「うーん……考えさせて」

「さあ、エンディングだね。次の質問が最後の質問みたい」

12・最初に召喚した友達のキメ台詞はなんですか？

「最初に召喚した友達って……あたしのこと？」

「そうだね、はりきりのことだね。はりきりのキメ台詞はなに？」

「あたしが答えるの？」

「あんたの台詞だから」

「そっか。それもそうだね」

「あんたって、ひねくれてるのが素直なのが、ホントわかんないわ」

「ありがとう」

「はいはい。さあ、最後のキメ台詞を、はりきりさん、どうぞ！」

「もうバトンなんてしないなんて、云わないよ絶対！」

「……お後がよろしいようで」

物語バトン おしまい

【エンディング】

脚本：詠み人知らず

監督：さすらい物書き

照明：National

メイク：愛されメイク&小悪魔メイク

大道具&衣装：中世ヨーロッパ風コーディネート

主題歌：「クライマックス・ジャンプ！ 回答中」

挿入歌：「ゲゲゲの鬼太郎のテーマ」モルディブより愛を込めて
」

特典映像：「女神のかかと落とし」習得修業、未公開シーン集

CG協力：スタジオジブリ

提供：カントリーマアムの不二家

スペシャルサンクス：槇原敬之

物語バトンをどすこいシスターズが答えたら。後編（後書き）

* * *

いかがでしたでしょうか？（笑）

このあと、もうすこしだけ「おまけ」がつきますので、
もうちょっと「はりきり」と「よりきり」のおしゃべりが聞きたい
なあと思われた方は、続きをお待ちいただけると嬉しいです。

「物語バトン」については、これまで。

おつきあいいただきありがとうございました〜！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3938p/>

物語ボタンをどすこいシスターズが答えたら。

2010年12月14日20時41分発行